信州読書会　ツイキャス読書会

課題図書　スタンダール『赤と黒』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub

『信州読書会』　メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。　http://bookclub.tokyo/?page_id=2343
『ツイキャス読書会』　音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

第 56 回のツイキャス読書会の課題図書は、スタンダールの『赤と黒』です。
二回目の開催でした。長い小説なので、何回もやって、読み込んでいきたいと思います。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

メルマガ読者　belouga さん

『コントロールの欲求と恋愛』

　ジュリアンの心的描写が細やかで、驚いてしまう。男性目線でここまで特定の男性登場人物の気持ちを事細かに追うのが、すごいと感じた。
 若きジュリアンが、立身出世を望み、美しいレナール夫人をないがしろにする描写でさえ、それもアリかなと思えてしまうのは、私の年齢によるものなのか、それとも作者の描写が緻密なゆえにか。まだ整理がつかない。

　階級の違いが、マチルドに、無意識にせよジュリアンをコントロールするように向かっていたり。はたまた、ジュリアンがレナール夫人に対して、「町長の妻」という社会的立場への腹いせとしてレナール夫人を操りたい欲求が見てとれたり。
　このような階級の違いによる恋愛模様が綴られている部分もあれば、身分を取捨して、純粋に男女の恋愛感情が綴られている部分もある。登場人物の気持ちも様々にゆらぎ、内実も複雑で、そこを読み解くのが複雑な小説だと感じた。

　残念ながら、今回も、最後まで読めなかった。
　上から目線のマチルドが、ジュリアンの子どもを身ごもるまでになる理由と、ジュリアンのレナール夫人に対する気持ちがこのあとどう変化していくかを知りたいと思った。

　ジュリアンが、誰かから真に祝福され、愛される事を願ってやまない。

　（おわり）

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』　http://ameblo.jp/clearmandarin/

メルマガ読者　さくらさん

『赤と黒ふたたび』

前回も赤と黒読みましたが、全部読めなかったように思います。今回はちゃんと読みたかったのですが、結局、途中まででした。

ジュリアンとレナール夫人との関係が前に読んだときは印象的で、ジュリアンの思い込んだら命がけ！みたいな所が面白いと思いました。

フランス革命の音声は聞かせて頂いているのですが、名前は聞いたことあるけど、どんな人だったかな？　ダントンは、容姿があまりよくないけど演説がとても上手で女のひとによくモテた…。ぐらいの情報しかなくてロベスピエールってどんな人だったかな？…ウィキペディアで調べながら読んだりしてたら、なかなか前に進みませんでした。

基礎知識が頭に入っていたらきっとすごく面白いんだろうなと自分を少し残念に思いながらも、少しずつ読んで楽しめる作品だなと思いました。

前回、説明していただいたと思いますが自分で読んでみても内容が入ってこなかったのですが、今回はじっくり読んだので印象に残った所は、

ジュリアンが、ある男に名刺を投げつけられて名刺の男に会いに行ったら実は別人で、しかも位の高そうな貴族だと知って怯みながらも決闘をしたら、後でジュリアンのような身分の低い者と決闘をしたという事が知られると名誉にかかわるから、ジュリアンの身分を偽るという結果になってしまった所です。上流階級の人でもいい人がいるんだなと思ったら、やっぱりそうなんだ……。って思いました。

私が、ジュリアンなら、かなりがっかりしたと思う。

ジュリアンがどんなに素晴らしかったとしても、貴族とは同じ舞台に立てない見えない隔たりを改めて感じて少し悲しく思いました。

（おわり）

メルマガ読者　山根さん

学び舎行動心理学

小学校のこと。クラスを受け持つ担任は、子どもたちの行動を一定の方向に促すことを日々行う。毎月１回、朝礼で校長先生の話を聞くために体育館へ移動する。10 月の運動会で玉入れをする。11 月は音楽会のために演奏したり歌ったりする。２年生はかけ算の練習をする。九九を唱える。漢字の書き取りをする。ホウセンカやサツマイモを育てる。５年生は椋鳩十の『大造じいさんとガン』を読み、６年生は宮沢賢治の『やまなし』を読む。

大人や社会が、学校ではこれが当然だと思うようなことも、子どもたちからすれば当たり前ではない。なぜ、どうして？　今日の朝は体育館にクラスみんなで移動するの？　担任がその子に近寄り、言葉でその意味や意義や価値を伝え小さな手を握っても、行動しない子はいる。

理解することと行動することは、一致する場合もあるけど、一致しない場合もある。分かっているけど、やめられないことがある。思ってもいなかったけど、やってしまったことがある。あることをしていても、その途中でできなくなってしまうこともある。頭で納得したら行動するのではない。

ジュリアン・ソレルは、家族や雇用主や師匠や恋人が彼に伝えたことと、その行動は鮮やかに別だ。レナール夫人と、マチルドの魅力。美しい土地の風景。興味深い社会的な背景。そんな周囲を切り開くジュリアン。周囲の期待と同一ではないジュリアンの行動。灰色ではない、鮮やかな赤と黒。

もし学校が、選挙のため開設された投票所のようであったら、つまらないだろう。誰にでもある一定の行動を促すために特化された構造だから、何も言わなくても人々が投票という行動をする仕組みが整えられている。学校で、学級崩壊になっているから悩む担任がいる。投票所のように、人間をある行動に移す構造を教室で実現しようと思うよりも、ジュリアンのような人がいることを前提に、一人の行動の内面を理解するよう努めることが必要と思う。

（おわり）

メルマガ読者　a. leaf さん

「小さな幸せ」と「大きな幸せ」と「本当の幸せ」

私が規定した「小さな幸せ」とは、自分の置かれた環境の中で幸せに生きるということです。「大きな幸せ」とは、自分の意欲や可能性に合わせて幸せに生きるということです。「本当の幸せ」とは、「小さな幸せ」＋「大きな幸せ」のことです。

ジュリアンは、「大きな幸せ」を選びましたが、最終的には「小さな幸せ」で生涯を閉じ、「本当の幸せ」に行きつくことができませんでした。行きつけれなかったのは、野心を持ったからでしょうか？　違います。

それは、環境のせいだと思います。

母親を早く亡くしたこと、父親から愛されなかったこと、兄弟からも嫌われたこと、階層社会のため貧乏から抜け出せないこと、自分の才能を生かせないし逆に妬まれてしまうこと、人は階層で尊敬されること、僧侶が偽善者で世俗的であること。これらの環境の中では、彼が自分の本心を偽り他人を疑う人間になってしまったことも、志のためには偽善者となり上流社会に入りこんで改革をしようと考えたのも、しかたがないと思います。

彼は終盤で野心と猜疑心が消え、本心を見せるようになります。ここは感動的で涙が流れました。ジュリアンをわが子のように愛してくれるレナール夫人、ジュリアンの意志を尊重し援助するフーケ、ジュリアンの未来を気にしてくれていたシエラン司祭。３人の愛がジュリアンの心の氷を溶かしてくれました。今まで見えないでいた真心が彼に見えたのです。そして、彼は罪を認め、自分の意志を貫き、処刑されました。才能ある若者が、「小さな幸せ」を喜び、亡くなりました。

切ないやり切れないとても悲しい場面でした。

こうならないように、打つ手はあったでしょうか？

私は父親の愛情があったらと残念に思います。しかし、貧乏生活から抜け出せない不満が、ジュリアンに冷たく当たった原因とも思いますので、無理だったようにも思います。

野心は悪ではないと思います。野心がないと進歩も生まれません。

才能がある若者を滅ぼさないために私たちが出来ることを考えるべきだと思いました。そして誰もが「本当の幸せ」に行き着く社会になるといいと思いました。

（おわり）

メルマガ読者　毒りんごさん

愛と自由を求めて。生首を献げる覚悟で。

赤と黒は、決して交わることのない象徴的な色。
恋愛小説の形ですが、痛烈な教会批判や当時の揺れ動く政治情勢を描いた小説。

また革命が起きるかもしれない。
どこか暗雲とした気配が登場人物の激情する感情の揺れにも表れていたように思う。

レナール夫人との密やかな恋も、マチルダとの身分の違う者同士の恋も、出会いのシーンは印象的。最初は興味のない態度からじれったいほど駆け引きが続き、なかなか進展しないと思っていたら急に情熱的に恋愛モードに落ちる。古典的な恋愛パターンはここが原点でしょうか。今では少女漫画でも使われませんが、2 階へはしごをかけて逢い引きすることも。

だけどスタンダールの描く恋する女の気持ちは、同調しきれない部分が多かった。大げさすぎる感情表現が、宝塚の舞台演出のように感じてしまったから。そもそもスタンダール先生、恋愛ベタなのでは、と余計なおせっかいまで浮かんだ。

ナポレオンを密かに敬愛しつつも、教会での荘厳なシーンに出会って司祭に憧れるジュリアンの揺れる野心は、田舎育ちの世間知らずゆえ、直球に影響受けすぎておろおろしている様子がどこか滑稽で可愛らしい。

生まれる前から運命づけられていたジュリアンの「意志」はどこにあったのだろう。
ナポレオンになれなかったにしても、平和で平凡な木挽き息子らしい仕事を、フーケは提案していたのに、断ってしまった。

二つの出世道を求め、砕かれ、自らの犯した罪に命を献げた純潔で情熱的なジュリアン・ソレル。
赤と黒を混ぜてしまえば、深い血の色となり、ボルドーに染まるギロチンの最期。
かつての革命に命を捧げた市民たちの血が、フランス人として生まれたからには情熱をもって求めるべき、「愛と自由」へ走らせてしまったのだろうか。

フランスの国歌は、1792 年にある軍人が作詞作曲した「ラ・マルセイエーズ」。
血で染まる旗をかかげた歌詞におののきながら思った言葉。
All You Need Is Love.
愛こそすべて。
あ、こっちはビートルズでした。

（おわり）

岡山読書会　主宰　yuuki さん

『　お前は臆病者か？武器を取れ！』

　タイトルは、ジュリアンがレナール家へ入る際に、自らを鼓舞するための言葉だ。貧しい木挽の息子であり、現実は何も持っていない。私は、ジュリアンが何を自らの「武器」として戦おうとしていたのか探りたかった。何も持っていないのは、私も同じだったからだ。

　レナール家を経て、神学校に入り、ラ･モール侯爵の秘書へと辿り着く。その際、恋愛も立身出世の手段とし、レナール夫人や令嬢マチルドと関係を結んでいく。

読み進めると、どうやらジュリアンの持つ「武器」の正体がわかり始める。

司祭から、僧侶になるために必要な節制と現世の幸福に執着を断つことができないと忠告された際に『おれはあの人にちゃあんと心底を見すかされている。あの人がいった「隠れた情熱」、立身出世というおれの野心のことなんだ。』に答えはある。最下層庶民で、親の愛情を受けずに育ったジュリアンには「野心」しかないのだ。野心の為なら、神を信じずに僧侶になることさえ厭わない。自らを向上させる為の野心は必要だが、後ろ向きの暗い野心だ。彼はその野心と恋愛をこじらせて、とうとう処刑される。

ただ、ジュリアンは牢獄に入ってこそ「本来の」人生を手に入れたように思う。出世もステータスも何も関係ない牢屋だからだ。人間は平常時では、とかく大事なものを見失う。でも、あの劣悪な家庭や貧困から、野心ひとつを抱えて走ったジュリアンを否定できない。だからこそ、レナール夫人に語ったこの台詞を読んで、私は安堵した。

（　引用始め　）
「ずっと以前に、あのヴェルジーの森を二人で散歩していたとき、わたしはずいぶん幸福になれたものを、あのときは激しい野心がわたしの心を空想の国の方へいつもひっぱっていったのです。（中略）
わたしはあの頃、えらく出世をするためにやらねばならぬ無数の闘争を心の中でまじえていたのです……まったく、あなたがこの牢屋へ来てくれなかったら、私は幸福というものを知らずに死んでしまっただろう。」
（　引用終わり　）

ジュリアン、レナール夫人、マチルドは、それぞれ牢屋で鎧を脱いで「ありのまま」になった。自ら亡き後の二人の女性の苦痛の心配までし、息子の処刑前でさえ金の無心をする父親に対応し…とジュリアンはどこまでもジュリアンだった。本当の武器は「野心」ではなく「ありのまま」の自分だったのだ。
作者も、第42章から45章まで副題をつけていない。ジュリアンの心模様に合わせているかのようだ。

（おわり）

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。
http://ameblo.jp/kaoru8913/
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

信州読書会　主宰　宮澤さん

「恋愛レボリューション21」

（引用はじめ）

実のところ、この二人がひたった恍惚境には多少意識的なところがあった。情熱的な恋も現実というよりむしろあるモデルの模倣であった。『赤と黒』下　岩波文庫　P189

（引用終わり）

ナポレオンは、コルシカ島の出身であった。彼は、ジョゼフィーヌと恋に落ちるまで、コルシカ人としての矜持があったそうだ。だから、コルシカの独立運動に失敗して、島民に排斥され、一家ともどもフランスに移住してからも、頑なに「ナポリオーネ・ブオナパルテ」とイタリア式に名乗っていた。しかし、ジョゼフィーヌとの恋愛が彼を、フランス人に変身させた。

ナポレオンは、アルプスを越えて、イタリアを遠征し、地中海を渡り、ピラミッドを目指した。 ジュリアン・ソレルも、ナポレオンを手本にして、勇気を奮って、ふたりの女性の寝室へとはしごを掛けた。大遠征である。レナール夫人やマチルドとの恋愛によって、彼は、ナポレオンの変身を再現したといえる。

革命の時代は情熱の時代だった。しかし、この作品の描かれた時代には、もう革命は終わっていた。

（引用はじめ）

現代を象徴しているのは、ませた子どもたちであるようだ。ほんとうに、たった一度だけでも、なにか途方もない愚行をやらかすような人間が、まだ一人でもいるものだろうか？

キルケゴール『現代の批判』 岩波文庫　P24

生活する人間にとっては、スタンダールの文章など、読めないのが当然だと私は思う。学究とか隠者とか、生活から距てられた骨董的老人が、愛読し、そして現代をのゝしるヨスガとする性質の、それも亦骨董品の一つではないかと私は考えているのである。

坂口安吾 『現代とは？』

（引用終わり）

ませたガキの、てんやわんやの大騒ぎがあるだけで、ほんとうの情熱など、この作品のどこにもありはしない。

読んでいる私にも、もはや情熱などない。情熱の死んだ現代。モノマネの時代。

骨董品みたいに干からびつつあり、現代を罵しる傾向のある私は、この作品が好きだ。　（おわり）

『信州読書会』　メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。　http://bookclub.tokyo/?page_id=2343